
へんぜるとあかずきん。

奏真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へんぜるとあかずきん。

【Nコード】

N38230

【作者名】

奏真

【あらすじ】

テンション高め赤ずきんと基本冷静なヘンゼル
彼らの営む小さな菓子屋 リトルプーカの店の前に
ある日、正体不明の少年がぶっ倒れていた。
イングヴェイと名乗った少年は、おとぎ話に主人公である彼らに
自分の物語に帰ってほしいと言い出して

それでもKY赤ずきん。

イングヴェイ君とヘンゼル引き連れ町へ買い物へ出かけていきました

なんやかんやで、二人はいつでも元気はつらつ

1. ハイテンションな奴は重宝すべき。(前書き)

キャラ崩壊注意です

1。 ハイテンションな奴は重宝すべき。

プロローグ

児童たるもの！

十四歳となれば犯行期…あ、違う

反抗期真っ盛りな時期なのである！

作者も犯行期なのは放って置くんだった全力で

というわけで グレーテルはいません！

強制的に始まり始まりー

一章

「キャッホオオオウ！！！！呼ばれて飛び出て ヤジャジャジャー
ン
ッ！！！！」

赤いずきんの赤ずきんちゃん！ただ今参上 ッ！！

ちょっとテンション下げようか

コメントがそれしか出てこないような、ノリにノッた声が響く

赤いずきんに白いワンピース。赤いマントを羽織って、片手には
小さな木カゴという、

グリム童話に出てくる《赤ずきんちゃん》そのものの少女

何を隠そう、彼女は《赤ずきん》本人である

・・・が、彼女の第一声から想像できるように

「ジャジャーントッ ジャジャジャジャーントッ!」

テンションが、異常に高い

・・・そして、もう一人

「赤ずきん。店の入り口で本気のエアギターやるのやめろ。
見てるこっちが悲しくなってくる」

赤ずきんとは裏腹に、冷静な少年の声が飛ぶ

「今日も見事にテンション低いね〜 ヘンゼルンッ

元気はっ つ〜! ? オ ナミン〜」

「伏字連発してんじゃねエぞ、ウザずきん

あと、誰がヘンゼルンだよ。ヘンゼルだって言ってるだろうが」

『ヘンゼル』

こちらにも、《ヘンゼルとグレーテル》でお馴染みの、兄の方である

「おい。兄の方ってなんだ。俺に妹はいねエし、

何で赤ずきんより、俺の扱いがぞんざいになってんだよ」

るせーよ。地の文に突っ込んでんじゃねーぞ、ヘンゼル

・・・まあ、気を取り直して

小さなレンガ造りの町。その外れに、この店があった
妙に丁寧な字体で

『リトルプーカ』

と書かれた看板を、小さな木造の小屋の入り口に掲げただけの店からは

甘い、菓子屋の香りが漂っている

要するに、菓子屋だ

「ねえねえ！ヘンゼル！聞いてよ聞いてよ！」

「よく聞えてるけどウルセーよ。低 費少女ハ ジか」

「あのね、今日も新しいお菓子作ってきたよ。食べて食べて！」

そういつて、赤ずきんは片手に持っていた木カゴから

自作らしい、ラッピングされたビスケットを取り出す

それを受け取ったヘンゼルは、すぐに袋を開き、口に入れた

「・・・ふーん・・・美味しいな・・・これも店に置くか」

「やったやった！！！」

販売担当ヘンゼルと、製作担当赤ずきんという、

なんともバランスの取れない二人が、この菓子屋を切り盛りしている

実際、上手くいっているのだから驚くべきことだ

「うるせーぞ、作者」

うるせーのはオメーだヘンゼル

地の文に突っ込むなって言ってるんだろ

「昨日ね、このビスケットと、あとチョコクッキー作ったんだ！」

「ふーん・・・じゃあ、チョコクッキーは？」

「この店の前で倒れてる人にあげちゃった」

「へえ……。え？」

突然の爆弾発言

「ほら、あの人」

に次ぐ自爆発言

赤ずきはそう思ったかと思うと、店の入り口から二歩、横に動いて外を指差した

全開になっている店の入り口からは、外の様子が良く見える

そこで初めてヘンゼルは

店の外の道で、一人の少年　ヘンゼルと同年くらい　が、足から血を流して倒れているのを確認した

・・・その少年の頭の上に、赤ずきが置いたと見える、チョコレートクッキーが入った袋がのっけているのと同時に。

「救急車呼べエエエエ!!」

叫ぶヘンゼル

続く赤ずきん

「救急車アアアア!!!」

「誰がそんな原始的な呼び方しろっつたよ」

「うわああ!?あの人足から血が出てるよ!!!?」

「今気付いたか!今気付いたんかアホずきん!いいから医者呼べ!!!」

ヘンゼルに乗せられるように、慌て始めた赤ずきんは、テンションのままに天然をぶちまける

「お医者さあぁぁん!!」

「よし!とりあえずお前が病院に運んでもらえ。脳の提供手術してこい!」

「ええッ!?じゃあ、私の頭の中はどうなるの!??」

「安心しろ。お前の頭は元からカラだ!」

冷静になる方法を間違えたのか

ヘンゼルの突っ込みもかなりズレている

「あ、あの・・・」

「!!」

不意に、倒れていた少年が、弱弱しく声を上げた

驚いたように、言い合いを中断させる二人に、少年は告げる

「病院は・・・マズいです・・・」

「!?」

「すみませんが・・・この店に・・・おいてもらえませんか・・・?」

1。 ハイテンションな奴は重宝すべき。(後書き)

すみませんでした

2。 変な人と変質者をイコールでつないだら負け。(前書き)

やっぱり進歩できないという。

2. 変な人と変質者をイコールでつないだら負け。

二章

「ヤッホーヒヤッホーキャツホツホー

ヘンゼルー！カレーできたよ！！

さてここで問題です！このカレーは何味でしょーかッ！？」

「カレー味じゃないカレーなんて、俺は認めねエ」

「正解は！さわやか青春味でした！！」

「認めねエよ？」

もはや成立しているのかしていないのかすら、定かではない二人の会話

『CLOSE』とかかれた看板を店の扉に下げ、臨時休業となったお菓子屋

膨大な量が置いてある店の奥からは、その営業者のほかにもう一人店にある白いベッドに、一人の少年が眠っていた

先程店の前で倒れていた少年。彼は「店においてくれ」と言った後、すぐに気絶してしまっていたのだ

赤ずきんとヘンゼルは悩んだ末に、店の中に彼を引きずり込み、ヘンゼルの使っているベッドに寝かせ、今の今まで看病を続けている状態である

「そうそう、ヘンゼル！私ね！このカレー作ってる間に

この子が何者なのか、ちょっと考えてきたんだよ！」

そういって、赤ずきんはカレーを少量、皿によそい、ヘンゼルに渡した

「ふーん・・・たとえば？」

カレーライスを受け取り、早速口に入れながら、ヘンゼルは問う

「えつとねー。パターン1は、ただ単に行き倒れちゃった旅人さん
パターン2は、馬車に引かれたかわいそうな人。パターン3は空か
ら降ってきた天使さんで、パターン4は、魔王に襲われた勇者さん。
パターン5は・・・」
「ストップ」

スプーンを咥えたまま、赤ずきんの熱論を止める

「最初に訊いとくけど、パターンは何まで考えた？」

「えつとねー！1863！！」

満面の笑みを浮かべる赤ずきん。絶句するヘンゼル
赤ずきんとは逆パターンの笑みを数十秒浮かべた後、ヘンゼルは
「ちなみに・・・」と口を開いた

「1863パターン目ってのは、どんなのだ？」

「えつとね・・・うーんと。」

『家出してきちゃった私達』を、連れ戻しに来た人！」

「・・・洒落になってねえって」

再び苦笑を浮かべるヘンゼル

・・・が

「正解ですよ・・・」

不意に、今まで寝ていたはずの少年が、寝たまま声を発した

「あッ、起きた！！！カレーどぞッ！」

「え???あ、あと・・・ありがとうございます」

ムクリ、と起き上がった少年に、早速赤ずきんは用意していたカレー皿を押し付ける

だが、反比例するように、ヘンゼルは少し警戒しながら、少年に尋ねかけた

「正解って・・・どういうことだ？」

「いえ。さっき『赤ずきんちゃん』が言ったとおりですよ？」

優しいな笑みを浮かべ、少年は微笑むが、ヘンゼルは一向に警戒をとかない

しかし。・・・これまた反比例している赤ずきんは、間の抜けた声で

「ふえっ!?キミって勇者さんなの!?魔王にやられちゃったの!?それとも天使さん!?おっこちちゃったの!？」

「いやぁ・・・。どう考えてもそっちじゃねエだろ」

ヘンゼルが突っ込む

「とりあえず、助けてくれて感謝します。

僕の名前はイングヴェイ」

「イングヴェイか、変な名前！」

「と、とにかく！その様子ですと、ヘンゼルさんはお気づきですね!？」

イングヴェイと名乗った少年は、助けを求めるかのように、話をヘンゼルの方向へ持っていく
ヘンゼルに話しかけながら、イングヴェイは無造作にベッドから降りようと、起き上がりはじめた

が

「あ、痛ッ!!」

すぐに、足を押さえてうずくまる

どうやら、自分が足から血を流して倒れていたことを、すっかり忘れていたようだ

案外バカである

「少し忘れていただけじゃないですか！バカはひどいです!!」

おい。オメーもヘンゼルと同類か？登場仕立てなのに、速効退場にしてやるのか？

この中で、地の文に反応しない っていう小説ルール護ってるの赤ずきんだけじゃねーか

もう赤ずきんの事突っ込む資格なんてありやしねーよ

「んで、何々？イングヴェイ君、キミは何でお店の前で倒れてたの？

お菓子、欲しかったの？」

「……ちがいますよ!!」

「え〜」

不満そうに唇を尖らせる赤ずきん

それを無視して、イングヴェイは一度息を吸い、それから言葉を吐き出す

「単刀直入に申し上げます」

「ヘンゼルさん。赤ずきんさん

お二人とも、『家出』なんかしないで、

『自分のおとぎ話の中に帰ってください』」

イングヴェイが言い終わると同時に

ヘンゼルはニヤリと笑い、赤ずきんは満面に最高の笑顔を浮かべながら、こういった

「「絶対嫌だ」」

2。 変な人と変質者をイコールでつないだら負け。(後書き)

すみませんでした
ホントごめんなさい

3。 何だかんだ言ってクラスに一人はKYがないと困る

(前書き)

恋愛書けないとか言っておきながら

それらしきものに発展しそうな・・・いや、しないか

とにかく今回もグダグダです

3。 何だかんだ言ってクラスに一人はKYがいないと困る

三章

「お二人には！」

そういいながら、イングヴェイは今度こそ勢いよく立ち上がり年齢相応の焦った様な表情を浮かべて、ヘンゼルと赤ずきんに詰め寄った。

「帰ってもらわないと困るんです！」

「・・・そりゃ、無理な相談って奴さ」

静かにヘンゼルは言葉を発する。

「俺たちは戻らない」

「何故ですか！？あなた方の居場所はおとぎ話の」

「あんなところに戻るのはまっぴら御免だって言ってるんだよ」

有無を言わさぬヘンゼルの声に、一瞬だけイングヴェイが怯んだ。キョトキョトと、戸惑ったようにしている赤ずきんだけが、この場の空気で生きている。

・・・そう感じるほどまでに冷え切った雰囲気をただ一人の人間

が作り出す

・・・ただ、それだけの光景

「・・・とりあえず、アンタ、どこから来たんだ？」

「・・・」

「・・・だんまりかよ」

声のトーンを落としたヘンゼルは、ただイングヴェイを視線だけで貫き続けていた

（本当に・・・）

耐え難い沈黙の中。イングヴェイは目の前の少年に、僅かな違和感を感じ、心の中だけで密かに呟く

（本当に・・・先程までの・・・赤ずきんさんに突っ込んでいた少年・・・）

ですか・・・？）

数十秒の沈黙の後、この重い空気をブチ壊したのは

「はぁーいッ！！ケンカリよーせーばいっ！！」

やはり、この人である。

「よーっし！二人とも！私と一緒に町に買い物に行きましょうーッ！」

拳を突き上げ立ち上がり、やはりハイテンションを保ったまま赤ずきんはニコリと笑う

「……いきなりだな……。とりあえず聞いておくけど、何でだ？」

「仲直りの印！！すごいよね！すごすぎるね！やっぱ人生って凄いな！」

「……ごめん。今とりあえず『人生』って単語が使いたかっただけ」

「わかった。会話する気ないだろ？」

後半の台詞が珍しく低いテンションに変えた赤ずきんに、

苦笑しながらも彼女の頭を軽く叩くヘンゼル。

通常と呼ぶべき空気が、赤ずきんによって取り戻されている事にただ、その光景を見ていたイングヴェイは気がついた。

重宝すべきは空気を詠まないハイテンションな女の子である。

恐いくらいの雰囲気を作り出していたヘンゼルも赤ずきんに突っ込む、ただの相方少年に戻っていたのだ。

ある種で言えば、ヘンゼルが赤ずきんの一方的なストッパーではなく、互いにストッパーとして一緒にいるのかもしれない

そう、イングヴェイが複雑に表情をゆがませた時だった。

「ほらほら！イングヴェイ君！行こうよ！それともココでお留守番してる？」

「冗談！ここにコイツをここに置いて行くぐらいだったら

お前の意味分からん天然発言に突っ込んでるほうがマシだったの！」

「ヘンゼル君ヘンゼル君。意味がちょっと分からなかったんだけど。

それは私を褒めてるの？それともけなししてるの？」

「褒めてるように聞えたんなら、今すぐ救急車呼んでやる」「酷い!?!」

いつもの会話を続けながら、赤ずきはイングヴェイの手を引く
張る

笑いながら。・・・ただ、屈託の無い笑顔を向けながら。

「・・・メチャクチャだ・・・」

そう小さく。小さく呟きながらも、イングヴェイは彼女の手を取った。

そして、彼は気がつかなかった。

自らの頬が朱に染まっている事と

先に店の入り口に向かっていいるヘンゼルが少しだけ
悲しそうに目を伏せたことに。

気が付かなかった。気付くはずも無かった。
ただ、赤ずきんしか見えていなかったのだから。

今 この時点では

四章 第一幕

『foodshop』

完結に『食材屋』である店の中から、元気すぎるハイテンションな少女の声が響いてくる

「すいまっつせーんツ!!バターと砂糖とチョコレート・・・
あとミルクとチーズと・・・。えーと・・・うーんと・・・」

指を折りながら、困ったような表情を浮かべる店員の前で、食材の名前を賢明に思い出していく赤ずきん。

「ヘンゼルに言われた通りのものを買ってくる!!!」、「と
意気込んで店員に声をかけたのだが、言われた通りの食材の名前が
出てこないらしい。

「えー・・・と・・・。うん。忘れた!なんだっけー!ヘン

ゼル!!」

で、結局諦める。

「会計場で俺の名前呼ぶんじゃないっ！！恥ずかしいのはこっちなんだって!!」

それに俺は、三十秒前に六つしか頼んでないだろうが!」

「ごめんごめん。じゃ、プロツコリー下さい!!」

「何でだアアア!!!!しかも手に持ってんのカリフラワー!!」

3。 何だかんだ言ってクラスに一人はKYがないと困る

(後書き)

反省はしています。後悔もしています。
進歩はしてませんがごめんなさい

4。 **ポケ放置する奴なんざ燃えて灰になれ（前書き）**

ぶっちやけ覚えてる人はいないんじゃないかな。うん。

とりあえず、自己完結させていただけなんでしょうか・・・orz

4. ポケ放置する奴なんざ燃えて灰になれ

第四章 第二部

数分後、

「あ……ありがとうございますー」

まったくといっていいほど噛み合ってくれない二人。

ソレにしては行きびったりな二人。+何もしていないイングヴェイは騒がしく食材屋を後にした。

それはもう嵐（荒らし）の如く。周りの店員と他の客にドン引きされる勢いで。

結果、彼等は、

ミルク。バター。チョコレート。チーズ。砂糖。

そしてカリフラワーを購入したわけである。

「アウトオオオ！」

ここでとうとう声が飛ぶ。

とは言え、流石常識人ヘンゼル。

ツッコミ役といえども、街中堂々と叫んでツッコむことはしなかった。

……ただ、赤ずきんの頬を引っ張るのみである。

「何でカリフラワーツ!? 俺止めたよな赤ずきん!？」

用途解かんねーんだよ! 今からでもいいから卵買いなおして来い

「!!」

「んみ〜ひたいひたい。ひたいよヘンフェルツ」

軽くとも思い切りとも付かない様子で、ヘンゼルは赤ずきんの頬を引っ張りながらまくし立てていく。

「いや〜。何かね、このカリフラワーさんが

『人生生きてりゃいいことあるしさ。ボクが友達になってあげるから元気だしなよ』

って言ってきてさ!だから友情を育もうと思っ

「仮に言ったとしても、そんな哀れに満ちた友情はいらねー」

そもそもの突っ込むべきところは、

このハイテンションウザずきんが、何故そこまで同情されるような状況に陥っていたのか、

というところだと思っただが。

・・・残念ながら。地の文に突っ込むな、とヘンゼルに言ってしまった為

みて見ぬ振りを決め込む事にする。

軽く呆れたヘンゼルは、赤ずきんの頬から手を離した。
が

「カリフラワーさんは優しいんだよ!」

「カリフラワーさんは身体に優しい の間違いだろ」

「若い頃の友情はブック フで買ってても

育む事を覚えなきゃいけない。って おばあちゃん言ってたよ!」

「中古で売る価値すらねーよ。すげーなおばあちゃん。

孫にどんな例えで友情って言葉を教えてんだ。もうドロドロだよ」

赤ずきんはスルースキルを入手したようだ。

ヘンゼルの突っ込みにもめげずに、街中堂々と力説。

そんな彼女を呆れたような目で一瞥し、ヘンゼルはひとつ、ため息を吐き出した。

「いいか赤ずきん。ある程度仲良くなったら別れを覚えることも必要なんだよ。

友人つてのはキャッチ&リリースなんだよ。

いいからさっさと返品して卵を買い直して来い」

お前も十分ドロドロだよヘンゼル。ピュアと天然を履き違えるな。

突っ込んでしまった？知らんそんなこと。

なんて、阿呆なこと言ってる間に

「・・・わかったよ・・・」

赤ずきんが折れた。

「おう。今すぐ行ってこいよ。待ってるから」

「・・・カリフラワーさんは私が助ける！」

ダッ

「は？」

ウソだZE

そういわんばかりに、赤ずきんはカリフラワーだけを抱え、

くるりと身を翻し、全力疾走を始める。

「アディオス・ヘンゼル！」

「逃がすか！」

赤ずきんのあとを追って、ヘンゼルも駆け出す。
その姿を見送りながら、同行者はポツリと呟いた

「……あれ？僕、アウトオブ眼中？」

4。 ポケ放置する奴なんざ燃えて灰になれ（後書き）

自己完結以前に話が進まない。

5。町（前書き）

年内に出せた…よかった…

けど、今回もグダグダ駄文フェスティバルです

どうしよう。

生暖かい目でみていただければ……いや、ごめんなさい

5. 町

第五章

数分後

「くそ……」

「逃げられた……っ！」

小さな町の、小さな広場。

小さい、と言っても、噴水や花壇が設けられたそれなりの広さではあり、本来ならば住民の集う、明るい場所である。……ハズだった。

しかし、今のこの広場は、子供が数人騒いでいるにも関わらず、どこことなく閑散とした空気が漂っている。

原因は、探さなくとも見つかる 至極簡単なこと。

噴水横に設置された木製ベンチ。

そこには二人の少年が腰掛けており、

……そのうちの一人が、何とも言えない負のオーラを醸し出していった。

あまりに禍々しいオーラの為、空気を読むことができない子供しか、この広場に残らなかつたのだ。

……ただ、それだけのこと。

「曲がり角を曲がった途端……見えなくなった……！！まさかアイツ、またろくでもない手品でも覚えたか……！？」

若干息を上がらせた、負のオーラ少年……もといヘンゼルは、悔しげに拳を握る。

その横で平然とクレープを頼張る少年は、心からの同情を込めて言葉を投げかけた。

「お疲れ様です」

「お前な……」

事も無げに言い切るイングウェイを一瞥し、少年はぼんやりと独り言を呟く。

「ったく……逃げ足ばっか早くなりやがって……。……いや……ま

さか、俺の足が遅くなったのか!？」

成長期なのに!？」と、一人で勝手に落ち込み始めたヘンゼル。

実の所、彼の心配は杞憂に過ぎなかった。

赤ずきんが曲がり角一つでヘンゼルを振り切れたのは、彼女が最寄の民家へ

「おじゃまします!」

の一言で飛び込むという、不法侵入極まりない行為を行っていたからである。

別にヘンゼルの足が遅い、遅くなってしまった。と言うわけではないのだが、彼はそんな事を知る由もなく。

「ま……。腹が減ったら帰ってくるだろ」

ただ小さなため息とともに、諦めの言葉を吐き出す。

「扱い方が犬のソレですけど……。いいんですか?」

「ああ、探すの面倒くさいし……。更に言うなら、腹減って我慢できなくなった赤ずきんが、手持ちのカリフラワーを完食しちまって、『カリフラワーさんごめんなさい』とか言いながら帰ってくることで、予想範囲内だから。自業自得って言葉が身に染みる、いい体験なんじゃないか?」

「どっちに同情すればいいのか分からなくなりました」

ゴクン、と音を立て、クレープを飲み込むイングヴェイ。

「同情?んなモン犬にでも食わせとけ」

「まあ……。そうですね。したって、伝わりませんから」

クレープを包んでいた、小さな紙くずを、手の中で弄びながら苦笑を浮かべる。

自分の背で、水が落ちて行く音を聞きながら、イングヴェイは静かに首を振った。

そして、口を開く。

「あなた方が理解できません」

「そりゃ、会って数時間で理解されちゃ、たまったもんじゃないけどな」

「……そんな物でしょうか。…いえ、そうなのかもしれないね」

納得できないのか、それとも、既に納得しているのか。

微妙に口元をへの字に曲げるイングヴェイをみて、ヘンゼルは少し困ったように顔を背けた。

感情的には困っているのだろうが、傍からみるヘンゼルの顔は、不機嫌そうな、ともとれる表情を浮かべている。

「ま、一年かかっても、十年かかっても、理解されたくないけど」

そう返す。

「誤解するなよ。俺だけじゃない。……少なくとも、この町の住民は皆そうだ」

「理解されたくない……ですか。傍から聞けば、ただの卑屈な町ですな」

皮肉の込められた台詞を吐き出す。ただ、言い放った本人のその表情は、皮肉気というよりも、自嘲気味ではあったのだが。

「おとぎ話の中でも、意志を持ってしまった登場人物……理解されたくない町……。」

「……確か、この町の『創始者』は
「ピノキオ」

ベンチに座ったまま、膝で頬杖を付き、ヘンゼルは答える。

「創始者は……ピノキオ。…アイツは、気づいたのさ。

何度も何度も、同じ事を繰り返す。自分が、ただの物語にしか存在しない、架空の存在なんだ。ってな。

……気付いた時、何もかも失望したそうだ。でも、何を思ったのか、ピノキオは立ち直った」

「……そして、おとぎ話を抜け出して、この町を造った……。」

確認するかのように、イングヴェイは呟く。そんな呟きに軽くうなづき、ヘンゼルは続けた。

「この町の創始者はピノキオ。ただ……他のにもたくさんいたんだよ」

「……？」
「意志を持つちまった…ピノキオと同じ、俺や赤ずきんと同じ奴らかな」

イングヴェイは首をかしげる。それをみて、「知らなかったのか？」と呆れたように、彼は息をついた。

「『はだかの王様』に出てくる、裸の王様を褒めていた大人。

『シンデレラ』に出てくる、舞踏会にいた貴族の男。

……『赤ずきん』に出てくる、赤ずきんの前に、狼に襲われて食わ

れたと、噂された子供。

説明するのさえ難しい、物語に直接関係の無い『その他大勢』のいくらかが、意志を持ったのさ」

「……」

「自分が本当に創られた存在であることを理解した、おとぎ話の住民が、この町には大勢いるんだ。

そして皆は、自分が『おとぎ話の住民である』ということをし、理解されたくない」

諦めたように、自分で確認するかのようになり、ヘンゼルはただ言葉を吐き出す。

「自分が誰かから作られた人形だ、何て、思い出したくはないから。……勿論、おとぎ話の中で、自分のことすら理解してない奴等もいる。」

その証拠に、『ヘンゼルとグレーテル』の、ヘンゼルである俺は、創られた事に気付いたけど」

「あなたの妹として創られた『グレーテル』は、それに気付かず、『ヘンゼルとグレーテル』の世界に残り、同じ事を……同じ台詞と行動を繰り返している。……それはおそらく、今現在も」

いつの間にか広場に増えてきた町の住民。それを眺めながら、イングヴェイは悲しげに、自らの座っているベンチをさすった。
しかし、

「……なんで、こんな話したるうなア……。バカみたいだ！」

突然、ヘンゼルの明るい声が頭の上から降ってきた。

「今思い出すと、どっからこの話題が出てきたのかさっぱりだな。何でこうなったんだ？」

「……あなたが突然語りだしたんでしょ？」

「そうだったっけ。おいおい…若年性アルツハイマーか俺？」

先程までの、現実を噛み締めるかのような表情は、ヘンゼルの顔から消えうせ、代わりに年相応のいたずらっぽい笑顔を浮かべている。

作り笑いだとは思えない表情だった。だが、何かを含んでいることは、誰がみても明らかである。

「…ヘンゼルさん」

「おい。同情なんてモンは、犬に食わせとけっていったろ」

若干黒い笑みを浮かべながら、ベンチから立ち上がるヘンゼル。立ち上がったから、二、三步 歩き、振り返ることなく、思い出したように、イングヴェイへと言葉を投げた。

「それと、お前の知らなかったこの町の情報は教えただから、赤ずきんが帰ってきたら、お前のこと全部話してもらってからな」

「え」

虚を突かれたように、イングヴェイの目が点になる。

「当たり前だろ。……ほら、帰るぞ」

「その……。ヘンゼルさんひとつ、いいですか？」

「ん？」

歩き始めたヘンゼルに、ためらいがちに声をかける。

「あなたと赤ずきんさんは……その……どんな関係なんですか？」

「俺とアイツ？」

振り返って、腕を組み、数秒だけ考える。そして、困ったように笑いながら、口を開いた。

「ま、俺たちの関係も、理解されたくは無いつてことで」

「え？」

「いくぞ」

その後、受け流された、と気付くのは、もう二、三分後だったという。

踵を返したヘンゼルに慌てて付いていき、広場を出るイングヴェイ。

「うええーん……カリフラワさんごめんなさいいいい……！」

その声が聞えたのは、先程の意味に気付いた、ほんの数秒後のこと
だったそうなの。

5. 町（後書き）

やっぱりグダグダでした。

町の説明がいきなり入るといふ。もう構成力誰か下さいorz

読んでくださった皆さん。よいお年をお迎えください。

また来年……できれば投稿させていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3823o/>

へんぜるとあかずきん。

2011年1月27日04時43分発行